

地域とともに 開かれた縁づくり

社会福祉法人 めぐみこども園 大島奈津美

1. めぐみこども園の紹介

めぐみこども園は、福井県福井市にある園です。福井市の中心部から少し離れた場所に位置し、自然豊かな環境の中で保育をしています。園児は180名で保育者は約60名在籍しています。『芽が出る、こども園』をコンセプトのもと、「一人ひとりの個性を尊重した保育」や「子ども達が遊びを選択しながら、子どもの姿や声からつながる、深まる、ひろがる保育」を大切に、子どもも、保護者も、保育者も、地域も、みんながワクワクするような「共主体」の保育を実践しています。

園庭においては、子ども達と保育者が対話を重ね、暮らしの中で私達『人』も生かされていることに感謝しながら、子ども達と共に可塑性、可変生のある「いのちまんなか」の園庭づくりを考えています。

2. フィールドワークに参加して

豊かな自然環境に囲まれたぐうたら村での研修に参加し、全国から集まった10名の仲間達と出会いました。フィールドワークに参加する前は、人間が真ん中にいて『自然は環境の一つに過ぎない』と感じていました。しかし、実際に森の中を歩いてみると、普段の生活では見落としてしまいがちな少し甘みを帯びた心地の良い土の香りや、草同士が触れ合いながら小さく「サラサラ」と響く音、土の中に掘られたモグラの通った道を見つけた時には、仲間達と感動を共有し、静かに営みを続ける生き物たちの姿を想像しました。

これらの身体全体で自然の息遣いを感じるという経験から、「人間も自然環境の一部である」「自然の中にお邪魔している」という感覚へと変化していきました。そして、これからどんなことに取り組んでみようかなと、期待を膨らませながら保育実践にチャレンジすることにしました。

3. 子ども達から始まった虫のお家作り

私は、まず初めにフィールドワークで体験した心動かされる経験（センス・オブ・ワンダー）を子ども達と共有したかったので、ぐうたら村で撮った写真を見せながら話をすると、子ども達の中から「もぐらの家を探しに行きたい」という声が上がりました。この興味をきっかけに、NPO法人の協力を得て、もぐらトンネル探



しを実施しました。施設の方に教えていただいた場所を中心に倒木を動かしたり、スコップで穴を掘ったりする中で、指一本ほどの もぐらトンネルを発見。子ども達は「本当に見つかった」「どこまでトンネルが続いているのか調べてみよう」「もぐらに会えるかな？」と大きな興奮と好奇心を示し、その後も目を輝かせながらトンネル探しに夢中になる姿が見られました。

また穴掘り作業中に、葉の裏に菌糸が付いていることに気が付いた子ども達。この発見をきっかけに、園でコンポスト作りに挑戦しました。ぐうたら村で見ていただいたバケツコンポストを書籍やインターネット等に頼らず、自分自身の感覚を頼りに再現しようとするのですが、初めての試みなので成功しているのかも分からず不安な日々が続きました。また発酵が進むにつれて、悪臭を放っているコンポストを覗き込みながら「どうしたら臭いが薄まるんだろう。ぐうたら村ではこんな匂いはしていなかったけどな」「水分量が多過ぎたのかもしれない。蓋をして密閉するのではなくネットをかけて風通しを良くしてみよう」「土が黒々として、カブトムシの臭いみたいになってきた」などと保育者自身が葛藤、試行錯誤する姿を見て、最初は全く興味を示さなかった子ども達が、保育者と一緒に雑草や野菜くずを細かく切ったり、温度計や湿度計を使って、コンポスト内の水分量や温度を測って記録するなど興味を持ち始めました。その姿を見て私は、園で取り組んでいる雑草堆肥、野菜くず堆肥の他にも様々な種類の堆肥があることを知らせることによって、さらに面白い学びになるのではないかと考え、手作り堆肥と市販の完熟堆肥、牛ふん堆肥の違いを観察してみることにしました。



すると、子ども達からは「臭い」「汚い」という反応や、Oくんからは「牛のうんちを触った手で僕に触らないで!」という声まで聞かれました。

そこで、保育者の「他の堆肥についてもっと知るきっかけを作りたい」という思いから、地域の牧場を訪問し、牛との触れ合いや堆肥場の見学を行いました。最初は鼻を摘みながら子牛と触れ合ったり、野菜をあげたりしていた子ども達でしたが、「牛ふん堆肥を畑の角に積んでおくと、カブトムシの幼虫がたくさん育つ」という牧場主の話を聞くと、生き物が大好きな子ども達の表情が一変し、宝物を見つけたかのように愛おしそうに牛ふん堆肥を手取る姿や、「お日様の匂いがするよ」「虫のこたつみたいだね」という子ども達の声の変化が聞かれるようになりました。これまで子ども達が「汚い」、「臭い」と感じていた堆肥が、生き物が育つ場という認識へと変化するだけで、こんなにも見え方や感じ方が変化するのだと思い、喜びと感動を覚えると



同時に、活動への可能性を感じました。

それから、園に戻りサークルタイムで話しをすると「堆肥で虫のお家作りがしたい!」という声が多く上がりました。この声を受けて、2tトラック分の堆肥を譲り受け、園舎裏に堆肥の山を作りました。この活動に

は、保育者、子ども達、地域の学生が協力して手押し車やたらいを使って運び、崩れないように囲いを作り、保護者の協力を得て看板作りにも取り組みました。看板作りでは、保護者に教えてもらいながら玄能を使って釘打ちをする経験は子ども達の心に残った様子です。子ども達の思いから始まり、全て自分たちで作り上げたからこそその思い入れや、園庭への愛着へと繋がっている様子が感じられたことを嬉しく思います。



また、この牛ふん堆肥の山が完成した時点では肝心のカブトムシの幼虫が手元に 0 匹だったため、保育者や保護者に呼びかけたところ約 100 匹の幼虫が集まりました。そこで牛ふん堆肥の山にカブトムシの幼虫を入れてあげて、自然な環境での飼育を始めました。この取り組みみは子ども達だけでなく、保護者の間にも大きな関心を集めたようで、降園時に「ここにカブトムシのお家を作ったんだよ」「牛ふん堆肥の中は温かくて、虫のこたつみたいなんだよ」と O くんが保護者の手を引いて堆肥の山を見せに来ていました。すると保護者からは、「牛ふん堆肥を触って温度を確かめても良いですか?」「家庭でも楽しそうに話しています」という声が



届くなど、ワクワクの連鎖が巻き起こっていることを実感しました。

4.子ども達の心の変化

子ども達により身近な生き物に親しんで欲しいという保育者の思いから、近隣の水族館や自然史博物館の協力を得て、月に一度生き物探検を実施するようになりました。季節ごとに園庭虫マップを作り、園にはどのような虫が、どのような場所に生息しているのかを子ども達と一緒に調べて 掲示するようにしました。すると、これまで以上に遊びの広がりが見られるようになり、わくわくフェスタ（発表会）では「お家の人に生き物について教えてあげたい」という声から、幼虫のお世話をしたり、子ども達で考えた虫クイズを出題したりと、



これまでの遊びを通して得た知識や生き物の面白さについて親子で楽しむ姿が見られました。

これらの遊びを通して子ども達に大きな変化が見られました。これまでは虫を見つけると飼育ケースに入れて持ち帰り、触れ合ったり観察したりすることを楽しんでいた子ども達。しかし、お世話をするとところまでは行き着かず亡くなってしまうことが多くあり、「生き物にもいのちがあることに気が付いて欲しいな」、「何度も話をしているけど、なかなか伝わらないな」と頭を悩ませていました。ところが、実践が進むにつれて「園庭に来ればいつでも会えるからね」「また遊ぼうね」と口にしながら、捕まえた虫達を園庭に逃すようになったことです。適切な環境下で生き物を育てることの難しさを経験する中で、生き物を愛おしく思う気持ちに育っていることに喜びを感じると共に、「カブトムシのお家でカエルさんが穴を掘って寝てたよ」などと日々の暮らしの中で、他の生き物とのつながりや出会い方への気づきの場になっていることを嬉しく思います。

5. 循環していく園庭へ

園のビオトープで栽培している水草が順調に増殖していることについて生き物探検の講師に相談したところ、水草が増殖し過ぎるとビオトープの中のメダカが酸欠になってしまうので、株分したり、観賞用にしたりと水草を減らすことの重要性を教えていただき、さらに水草を販売できる可能性があることも教えていただきました。そこで、職員間で話し合いをする中で地域行事「越前めだか祭り」の存在を知り、販売の機会を得ることができました。ちょうどその頃、4.5 歳児クラスでのお店屋さんごっこが盛り上がっていたこともあり、子ども達や保護者に参加を呼びかけたところ、10 組の親子が参加する活動へと発展していきました。販売に向けて、子ども達と一緒に水草について調べ、株分作業を行いました。

越前めだか祭り当日は、最初は緊張気味だった子ども達も実際にお客様との関わりを通じて、次第に手応えを感じている様子でした。「この水草がおすすめです」「めだかと一緒に入れると喜んでくれますよ」など生き生きとした声で接客を楽しむ姿が見られました。保護者の方々も水草について事前に調べてくださり、お客様への丁寧な対応で子ども達をサポート。子ども達のワクワクしている気持ちが、保護者やお客様、地域にまで伝わる様子が見られ、温かな交流の場となりました。地域行事終了後、子ども達や保護者からは「貴重な



経験が出来て良かった」「またお店屋さんがしたい!」という声が多く寄せられ、翌月にも予定されていた同様の地域行事への参加にもつながりました。2回目のイベントでは3歳児の子ども達まで遊びが広がっただけでなく、未満児の保育者も自ら参加したいと、ワクワクが広がる様子が見られました。子ども達が地域社会の一員としての自覚を育むとともに、地域の方々にとっても園がより身近で親しみやすい存在となることを期待しています。また、持続可能な循環した保育を、子ども達と共に探求し、子ども達の育ちや学びにつながる豊かな環境を整えていきたいです。

また秋頃になり、虫のお家作りで利用した牛ふん堆肥の再活用方法を職員間で話し合っていた時に、堆肥を水で捏ねて固めると、レンガのようになることを知りました。ちょうどその頃、3歳児クラスで「焚き火遊びがしたい」と遊びが盛り上がっていたので、牛ふん堆肥を使ってかまど作りに挑戦してみることに。すると、一



部の堆肥が固まるのを見て「うんちのお団子」と子ども達は名付けていました。その後、実際に焚き火遊びへと発展すると、「牛ふん堆肥はポカポカしてるから、炭と一緒に入れたらどうなるかな」と炭と一緒に堆肥を燃やしてみたり、「炭や牛ふん堆肥を畑に撒いたら栄養になるかも」という声から、細かく砕いて畑の土に混ぜ込んでみたりしました。これらの活動を通して、子ども達の中に「再活用できないかな?」といった選択肢が自然と増えたことに喜びを感じています。

6. 保育実践のまとめ

私たちの園で初めての大きなプロジェクトに取り組む第一歩として、ぐうたら村でのフィールドワークで得た経験や感動を、園の職員たちに共有することから始めました。しかし、自然との触れ合いから得た感覚的な体験を言葉にすることの難しさに直面し、思うように伝えることができないもどかしさを感じました。

研修でゴリさんが指摘されたように、周囲の方々にとっては地球規模の環境問題やこの取り組み自体を、自分ごととして捉えることは容易ではないことを痛感しました。その為、保育者、子ども達、保護者、そして地域の方々をどのように巻き込んでいけるか、その方法を模索する日々が続きました。

しかし、真剣に園庭環境に向き合い続ける姿勢が（一人の保育者の思いや熱意が）、自然と周囲に広がっていく手応えを感じるだけでなく、今では職員を含め、保護者や地域の方など色々な方が理解・協力してくれることに嬉しさを感じています。また、子ども達や保育者の動きや暮らしぶりが、社会から見えにくくなっている現代で、保護者だけでなく地域の方から「是非、お手伝いに行きたいです」とボランティアの申し出があったり、地域行事後には「地域と園で次はこんなことをしてみたいですね。そうするともっと地域が盛り上がる

と思います」などというお誘いを受けたりもしました。このことから、子ども達や保育者のワクワクが、保護者だけでなく地域の方にまで届いていることが分かりました。今後も園が地域の拠点となるように、園が地域をつなげる役割となるように開かれた園作りを心掛けていきたいです。